

大学生に対する情報教育の内容と方法に関する実践的研究

園 屋 高 志

(2002年10月9日 受理)

Practical Research on Information Education for College Students

SONOYA Takashi

要 約

筆者は約10年前に、大学生にメディアリテラシーを育てるメディア教育の実践的研究を行い、既に報告してきた。その後現在までの間に、コンピュータやインターネットの急速な普及など、大学生を取り巻くメディア環境が大きく変化し、それと共にメディアリテラシーを含む情報活用能力の必要性が提唱されてきた。そこでこの変化に対応し、情報活用能力を育てる情報教育が必要と考え、従来のメディア教育の内容を2001年から情報教育として再構成し、実践・評価する研究を行っている。すなわち、大学生に必要な情報活用能力として、①情報の収集能力、②情報の判断能力、③情報の発信能力、及び④情報モラル、という四つの能力や態度を挙げ、それらを意識させ、習得させることを意図した教育内容や教育方法を構成・立案した。そして「情報メディア論Ⅰ」等の授業でそれを実践した結果、概ね筆者の意図は達成されたことがわかった。

1. 研究の目的

1-1. 本研究の前提となるメディアリテラシーとメディア教育の意味

筆者はこれまでに、大学生にメディアリテラシーが必要であり、大学においてそれを育てるメディア教育が必要であることを述べ、さらにその実践を試み、その方法、内容、評価結果等を既に報告してきた^{1) 2) 3) 4)}。

上述のうち「メディアリテラシー」については最近特に注目され、様々な考え方が出されているが、全体の構成上ここにそれらを要約して述べる。

まず、坂元は次のように述べている⁵⁾。「最近では、話しことばや書きことばなどの言語以外のコミュニケーションの手段が発達し、それらの助けを借りなければ現代を生きることができないほどになっている。絵本、漫画、テレビ、ビデオ、コンピュータなどのメディアである。そこで言語のリテラシーに対比される概念として、視覚リテラシー、テレビリテラシー、コンピュータリテラシーなどの用語が使われるようになった。映像によるコミュニケーションの能力、テレビによるコ

コミュニケーションの能力、コンピュータによるコミュニケーションの能力こそが現代人の備えるべき必須条件となってきた。(中略)今日では、視覚リテラシー、テレビリテラシー、コンピュータリテラシーを、まとめてメディアリテラシーと呼んでいる。」

一方、鈴木は「メディア・リテラシーとは、市民がメディアを社会的文脈でクリティカルに分析し、評価し、メディアにアクセスし、多様な形態でコミュニケーションを創り出す力を指す。また、そのような力の獲得をめざす取り組みもメディア・リテラシーという。」⁶⁾としている。

また、菅谷は、「メディアが形作る「現実」を批判的(クリティカル)に読み取るとともに、メディアを使って表現していく能力のことである」⁷⁾としている。

さらに、藤川が定義を整理し、「メディアリテラシーには、メディアの受け手としてのクリティカルな態度とメディアの作り手としての創造的な態度との両方が含まれると考える必要がある。」⁸⁾と述べている。

これらに対して、筆者のこれまでの研究での定義は、「メディアに対して、関心や親しみを持ち、その特性(長所、短所など)や使い方を知り、使いこなしていく能力や態度」としているが、この「使いこなしていく」という文言に、上述の藤川が述べた「メディアの受け手としてのクリティカルな態度とメディアの作り手としての創造的な態度」を含めているつもりである。

なお、「メディア教育」は、簡単に言えば「メディアリテラシーを育てる教育」のことである。これについては坂元が述べたように「①教育にメディアを活用する ②メディアそのものの特質を研究・教育の対象とする 二重の意味」⁹⁾があるが、筆者の研究においては、メディアそのものについて教えるという意味で後者の②を指す。ただ、筆者の実践では、講義で種々のメディアを活用しているので、その教育方法として①の意味も有している。

1-2. メディア教育から情報教育への変化

さて、かつての筆者の一連の研究は約10年前であったが、以後10年間に我々の生活や社会におけるメディア環境は大きく変わってきており、大学生を取り巻くメディア環境についても同様に変化していることは周知の通りである。従って、必要なメディアリテラシーやメディア教育についても、その内容・方法を再考すべき時期にきたと考える。

一方、後述するようにメディア教育から情報教育へ変えていく必要性が生じている。

そこで筆者は、これまでのメディア教育の実践研究をもとにして、大学生に対する情報教育を実践することにし、特にその内容・方法について構成、立案、評価する研究を行うことにした。

まず、上述のうちメディア環境の変化について述べる。それは次のようなことである。

(1) コンピュータの急速な普及

これは改めて言うまでもないことであるが、総務省の「通信利用動向調査」によれば、日本のパソコンの世帯保有率は2000年には50.5%に達し、1995年の16.3%から大きく伸びており¹⁰⁾、このことからわかる。また、「情報化社会と青少年に関する調査」¹¹⁾においても、青少年

(12歳～29歳)の使用している機器のうち、パソコンは1996年6月の9.7%から2001年11月の44.1%へと、5年間で急速に増えている。

(2) 10年前には使われていなかったインターネットの出現と急速な普及

10年前には一般には使われていなかったインターネットもここ数年で急速に普及している。日本では、インターネットの利用人口が1997年末には、1,155万人(人口普及率9.2%)であったものが、2001年末には5,593万人(44.0%)¹²⁾に昇っているほどである。

(3) 携帯電話の普及

携帯電話の普及も周知の通りである。契約数が2002年3月末現在で6,912万契約に達しており、これは、東・西NTTの加入電話契約数5,074万契約よりも多い¹³⁾。上述の「情報化社会と青少年に関する調査」¹¹⁾においても、青少年の携帯電話の使用は、1996年6月の9.5%から2001年11月の74.7%へと、急増している。また、筆者が鹿児島県内大学生221名に2001年11月に調査した結果では、95%が所有していることがわかっている。

(4) 大学生にとって相対的に低下した新聞の位置づけ

このことについては第3章に詳述するが筆者の調査では新聞を読む大学生が減りつつあることがわかっている。

以上のようなメディア環境の変化に加え、もう一つ考慮すべきことは、最近情報教育の必要性が唱われてきたことである。

情報教育は情報活用能力を育てる教育である。従来から情報活用能力の必要性は言われていたが¹⁴⁾、1998年に情報教育の目標が「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の三つに明確化され¹⁵⁾、新学習指導要領では小学校から高校までの体系的な情報教育が打ち出された。

このように、メディア教育を再考すべき時期にきたことと、情報教育の体系化とを併せて考えると、大学においてもメディア教育から情報教育へ変えていく必要がある。すなわち、メディアを使いこなすメディアリテラシーだけではなく、それが媒介する情報の活用能力も含んだ情報活用能力を育てるための情報教育である。改めて引用するが情報活用能力は「情報及び情報手段を主体的に選択し活用していくための個人の基礎的な資質」¹⁴⁾である。この中の「情報手段」がメディアである。つまり、情報活用能力はメディアとそれが媒介する情報の活用能力を意味している。

従来筆者が行っていたメディア教育で育てるメディアリテラシーも、実際には情報活用能力に近いものであったが、今般研究対象とした情報教育では、より情報の活用能力にウエートを置くことにした。

なお、あえて付記するが、筆者の属する教員養成学部においては、さらに次のようなことも考慮して情報教育の内容・方法を構成する必要がある。

それは、情報化に対応できる教師の育成である。平成14年から実施された新学習指導要領には、「第1章 総則 第6 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」の中に、「2(9) 各教科等

の指導に当たっては、生徒がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を積極的に活用できるようにするための学習活動の充実に努めるとともに、視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。』¹⁶⁾ (中学校, なお小学校も同様) と記述されている。すなわちこれまででは書かれていなかった, コンピュータや情報通信ネットワークなどの適切な活用が, 今度は明確に記されていることが特徴であり, これにより, 従来の視聴覚教材や教育機器だけではなく, コンピュータや情報通信ネットワークの活用が欠かせないものになってくる。従って教科の学習や総合的学習の時間等で, これまで以上にコンピュータや情報通信ネットワークを使う場面が増えることが予想され, それに対応できる教師の育成が必要である。

以上述べたようなことから, 筆者はこれまでのメディア教育を情報教育に変え, その内容・方法について実践的に研究することにした。

1-3. 習得すべき情報活用能力

筆者が大学における情報教育を実践するにあたって, 目標として設定した情報活用能力は特に次の4点である。

①【情報の収集能力】・・・多くの情報の中から必要な情報を収集する能力

身の回りには様々なメディアが存在するが, その中から適切なメディアを選択すると共に, そのメディアを活かして, 自分の求める情報を得る能力を身につける。

②【情報の判断能力】・・・情報が適切なものであるかを見極める力

たとえば新聞やテレビの情報は, 人の手を介して伝えられている, つまり発信者の意図が入っているので, 鵜呑みにしてはいけないことを理解する。また, インターネット上で検索すると多くの情報が得られるが, その中から得られる情報の真偽を見極める力も必要である。

③【情報の発信能力】・・・自分の考えをわかりやすく表現して相手に伝える力

国際理解や, 共生社会に生きるためには, 人間同士のコミュニケーションが大切となる。そのためには, 相手の話を聞く能力だけでなく, 自分の考えをわかりやすく表現して相手に伝える, 情報の発信能力が必要となる。

④【情報モラル】・・・情報を扱う際のマナーやモラル

これは上述の①②③に関わることであるが, 情報活用を行う際には, 著作権, プライバシー, 有害情報, 電子メールのマナー等, 種々配慮すべきことがある。それを知り, マナーやモラルを身に付けておく必要がある。

これらの情報活用能力と先に紹介したメディアリテラシーの定義との関わりについて述べると, ②の「情報の判断能力」は, 鈴木, 菅谷, 藤川の定義での, 「受け手としてのクリティカルな態度」に関わるものである。また, ③の「情報の発信能力」は, 坂元, 鈴木, 菅谷, 藤川のそれぞれの定義の中の, 「コミュニケーションの能力」「コミュニケーションを創り出す力」「メディアを使って表現していく能力」「メディアの作り手としての創造的な態度」に相当している。ただ, 筆

者が挙げている「情報モラル」については、彼らの定義では直接触れていない。

筆者はこれらの情報活用能力が必要であると考え、情報教育の内容・方法を構成し、実践した。

2. 情報教育の実践と評価

2-1. 対象とした授業の概要

情報教育の対象とした授業は、以下の二つである。

〔授業1〕A大学「情報メディア論Ⅰ」

これは高校新教科「情報」免許用科目で、単位取得者は2001年度は46名であった。この科目で情報活用能力を扱っておけば、受講者が将来「情報」を教える時に、高校生に対して情報活用能力を意識して教えられることが期待される。その意味でこの「情報メディア論Ⅰ」で扱うことは意義があると考えた。

〔授業2〕B大学「教育メディア論」

これは当該大学においては教員免許、学芸員資格、司書資格取得希望者は必修の科目であり、2001年度の単位取得者は93名であった。

本章では、上記のうち〔授業1〕での実践について述べるが、2-3については〔授業1〕と〔授業2〕の実践を合わせたものを述べる。

〔授業1〕の授業内容の概略は次の表1の通りである。

表1：「情報メディア論Ⅰ」の内容

1. メディアの意義と役割 (1) メディアの意義と種類 (2) メディアの果たす役割	4. マルチメディアの活用 (1) マルチメディアの意義と役割 (2) マルチメディアを活用した表現・処理
2. 各種メディアの特性	
3. 情報メディアの特性 (1) コンピュータ (2) インターネット (3) その他の情報メディア	5. 情報メディア利用上の留意点 (1) 情報の見極め (2) 情報モラル

この授業の中で特に習得させたい情報活用能力として、前述の1-3の①～④を挙げ、それに関する演習をさせるという方法をとった。その実際を以下に述べる。

2-2. ①【情報の収集能力】に関して

これについては、インターネットによる情報検索課題を与え、検索エンジン等を用いて検索する演習を行った。その検索課題の作成にあたっては、瀬川^[7]や川口^[8]の実践例を参考にした。これらの例では、明示的な課題だけではなく、情報要求があいまいな課題、時間的に変動するような情報に関する課題を提示したり、検索エンジンの使い分けやキーワードの工夫を考えさせるような課

題を出している。

{ 演習 1 }

筆者は上述の瀬川や川口の例に習って、次のような検索課題を出した（以下はその一部）。

Q 1. 最新の円とドルの交換レートはいくらか？

Q 2. 新学習指導要領に示された、「総合的学習の時間」の予定時間数は、小学校、中学校、高校それぞれいくらか？

Q 3. 西鹿児島駅前 \longleftrightarrow 博多間を JR（特急）と飛行機で行く場合の料金と所要時間を比較せよ。

Q 4. 日本における「世界遺産」で、屋久島の次に鹿児島に近いところ（もの）はどこか？

{ 演習 2 }

検索エンジンによる違いを認識させるため、同一のキーワード（ここでは「鹿児島大学」と「USJ」）を二つの異なる検索エンジン（たとえば Yahoo と goo）に入力し、検索結果の違いを調べさせた。

{ 演習 1・2 の感想 }

これらの検索課題から、インターネットによる情報検索はどのような特徴があることがわかったか、及び感想を書かせたが、その一部は下記のようなものであった。

- 1) A の検索サイトでは見つからなかったものでも、B の検索サイトだと見つかる事もあるので、検索する時は様々なサイトで見比べるのが良い。短所はページに載っている情報が浅かったり一方的な見解だったりするので、図書館など文献から調べた方が良い場合もある。
- 2) ノイズが多く、うまく必要な情報を得るためには取捨選択しなければならない。ただ、そうやってヒットした中に思いがけず有効な情報がひっかかって足がかりとなることも多い。本などで探すより時間が短縮できるのも大きなメリットだが、その情報の信頼性については、問題となることも多いのが現状である。さらに個人情報などもネット上にあると検索でひっかかることがあり、その安全性（危険性）においても注意が必要となる。
- 3) 情報を得るための一つの方法としてインターネット利用があげられるが、利用する際、複数の情報を比較検討することを必ずするべきであると感じた。ホームページはある程度自由に制作できるため、多少いいかげんな情報が書いてある場合がある。それを見極めるためにも、複数の情報を比較することは大切である。

{ 演習 3 }

さらに、以下のように検索課題を学生自身に作成させる演習を、レポート課題としてさせた。

Q. この授業では、インターネットによる情報検索演習を行った。そのとき、できるだけ興味・意欲を持って取り組める課題（前述の演習 1 のような課題）を出したつもりである。そこで、今度はあなたがそのような課題を出す立場に立って、おもしろい検索課題やユニークな検索課題、役立つ検索課題、タイムリーな検索課題など、学習者が興味や意欲を持って取

り組めるような検索課題を3問作りなさい。そしてその課題の回答例（回答例と、その回答の載っているサイトのURL）を示しなさい。

この課題の意図は問題を作らせることによって、いろいろなページがあることに気付かせることである。これについての結果は省略するが、学生の回答には、筆者の意図するような、おもしろい、ユニークな、役立つ検索課題は少なかった。次年度はこの課題の出し方を再検討したい。

2-3. ②【情報の判断能力】に関して

これについては、[授業1]と[授業2]で次のような演習をレポート課題の形でさせた。

{演習4}

ある一つのニュース、出来事、話題等について、2種類の新聞がそれぞれどのように扱っているかを調べ、その相違点を述べなさい。さらにそれをもとに新聞という一つのメディアの特性を述べなさい。（解答書式は省略）

この演習課題の意図は、メディアからの情報は発信者の意図が入っており、そのまま鵜呑みにしてはいけないことに気付かせることである。これは以前から毎年「教育メディア論」の授業で筆者が出しているもので、その結果等も報告しているが¹⁹⁾、今期は「情報メディア論Ⅰ」の授業でも課した。とかく「情報メディア」と言えば受講者はコンピュータやインターネットを対象に考えがちであるが、身近なメディアとして新聞に着目してほしい、という筆者の意図もある。

{演習4の調査結果}

2001年度はこの課題を前述の二つの授業で実施したので、調査結果をまとめて述べる。回答者は136名（男60名、女76名）である。

(1) 調べた2種類の新聞の組み合わせ

調べた2種類の新聞の組み合わせをまとめると、次のようになっていた。

全国紙－地方紙 66.2% 全国紙－全国紙 20.6% 地方紙－地方紙 3.7%
スポーツ紙－スポーツ紙 2.9%

あとは、全国紙とスポーツ紙、全国紙と九州地区紙など。

上述のように、全国紙と地方紙を比較したものが2/3を占めていた。

(2) 調べた新聞（A紙とB紙）は日頃よく見ている新聞か？

この質問に対する回答結果は、表2の通りである。

表2：調べた新聞は日頃よく見ているか新聞か？

(%)

	はい	いいえ	無回答
A 紙	50.0	44.9	5.1
B 紙	23.5	76.5	0

表2のように、結果的にはふだん見ていない新聞を読ませることができた。なお、A紙もB紙も日頃よく見ているという回答は5名(3.6%)であった。

(3) この記事(課題に書いた記事)を選ぶ際には、他の別の内容の記事も比較してみましたか?

1. そうした。78.7%
2. そうしないでこの内容の記事だけを比較した。20.6% (無回答0.7%)

このように、他の記事も比較した上で書いていることがわかる。

(4) この課題に書いた記事について読んだ新聞は、上記の二つの新聞だけですか? それともこれ以外の新聞も読みましたか?

1. 上記の二つの新聞だけ。 41.9%
2. これ以外の新聞も読んだ。 57.4%
- (無回答 0.7%)

(3)(4)の結果から、複数の新聞で複数の記事に目を向けさせる効果があったといえる。

(5) あなたはこのように二つの新聞を見比べてみる、ということをふだんしていますか?

1. いつもそうしている 0.7%
2. ときどきそうしている 18.4%
3. あまりそうしていない 20.6%
4. まったくそうしていない 60.3%

このように、ふだんはこのようなことをしていない者が多いことがわかる。それだけにこの経験は貴重なものとなったようである。

(6) この課題をしてみて、思ったことを以下の中から選びなさい。(複数回答可)

1. 同じ内容でも新聞によって書き方が異なることに初めて気づいた 50.0%
2. 二つの新聞の書き方が異なっていることに驚いた 43.4%
3. 新聞記事は、書く側の意図が入っているのだと思った 43.4%
4. 新聞記事は、そのまま鵜呑みにしない方がいいと思った 31.6%
5. 二つ以上の新聞を見比べてみるのが大切だと思った 61.8%
6. 新聞と新聞以外のメディア(テレビなど)見比べてみるのが大切だと思った 50.7%
7. 新聞記事について、関連して図書を調べてみるのが大切だと思った 10.3%
8. 新聞記事について、新聞社に意見を言うのが大切だと思った 2.9%
9. 新聞記事について、家族や友人などと話し合ってみるのが大切だと思った 32.4%

上記の1, 2, 3, 4, 5のいずれか一つでも○をつけた者は、136名中134名で、筆者の意図は達成されたと考える。

(7) 自由記述の感想としては、以下のようなものがあつた(原文のまま)。

- 1) 自分が今まで、一番信用していた情報源を、「本当に確かか?」と考えられるようになった。こういった機会がなければ、いつまでも「大丈夫だ」と思ったままであつたように思う。

実におもしろい経験でした。

- 2) 一つの事件でも、「十人十色」という言葉があるように、様々な受け取りかたがあるのだなあということを感じた。私は、いつも一つの決めた番組や雑誌や新聞しか見ていないので、回りのことをよく知っていなかったのだ、と思った。これは、一種の軽いマインド・コントロール状態であると思う。
- 3) いつも、ただ漠然と読んでいた新聞を他の新聞とあらゆる面から比較し違った角度から改めて見る事で、新聞というメディアの見方が変わってきた様に感じる。言葉の表現の仕方や視覚的な面において等、普段、気にも止めなかった部分に目をやる事でただ読むだけだった新聞が視たり、考えたり、比較したりと幅をもったものとなり、メディアとは何かを改めて考える機会となった。
- 4) 新聞だけでなく、テレビやインターネット等にもこのような違いを見つけてみたいと思いました。
- 5) 新聞は積極的に情報を得ようとしないと見るものが少ないもので、最近ではネット上でこれらの情報を得るために読む機会がほとんどなくなっていた。この課題のおかげで新聞に目を向けることができたので、いい機会だったと思う。新聞には新聞の優れた点があるので、その時の自分の状況でメディアを選択していけばいいと思う。

以上の感想からも、2つの新聞記事を比較させる筆者の意図は達成されたと考えられる。

2-4. ④【情報モラル】に関して

これについては、授業の中で情報モラルについて講義した後、前述の情報検索演習の際に、併せて次のような演習をさせた。

{演習6}

「懸賞、プレゼント、モニター」などのページをいくつか見てみなさい。その結果、どんなことに気付きますか？

この演習の意図は、次の二つである。

- (1) このようなページで応募すると、自分の個人情報を発信してしまうことになるので、気をつけるべきだ、ということに気づくこと。
- (2) 各ページが個人情報の扱いについてどの程度配慮しているかを確かめること。そして、配慮のあるところとないところがあることに気づくこと。

{演習6の結果}

学生は気付いたこととして以下のようなことを書いていた。

- 1) 賞品に応募する際に、会員にならなくてはならなかったり、必要以上に多くの情報を記入しなくてはならないものが多かった。
- 2) 個人情報を扱うことへの配慮がされているところとそうでないところがあるようだった。

3) 当然のように住所等を聞いてくる。必要最小限でいいはず。

このように、実際にこのようなページを調べることによって、個人情報流出の問題を意識したようである。

なお、4つの能力のうち、③【情報の発信能力】については、「演習5」として、授業で簡単なWebページ、または「PowerPoint」によるプレゼンテーションの作成演習を行い、最後に期末課題として、自由な内容でそれを作成させ、提出させた。この結果は省略するが、各自いろいろなテーマで作成していた。

3. 今後の課題

以上情報教育を実践し評価した結果を述べたが、今後の研究課題を挙げておく。

3-1. 新聞の利用に関して

まず、1章でふれた新聞の利用に関することである。

筆者は新聞の利用に関して従来から以下のことを尋ねて調査している。

「Q. あなたは、新聞を見ていますか？ あなたの現状を平均的に考えて、つぎのうち該当するものに○を下さい。」

この回答結果を図1に示す。同図からわかるように、年々「毎日見る」者は減り、逆に「まったく見ない」者が増えている現状にある。

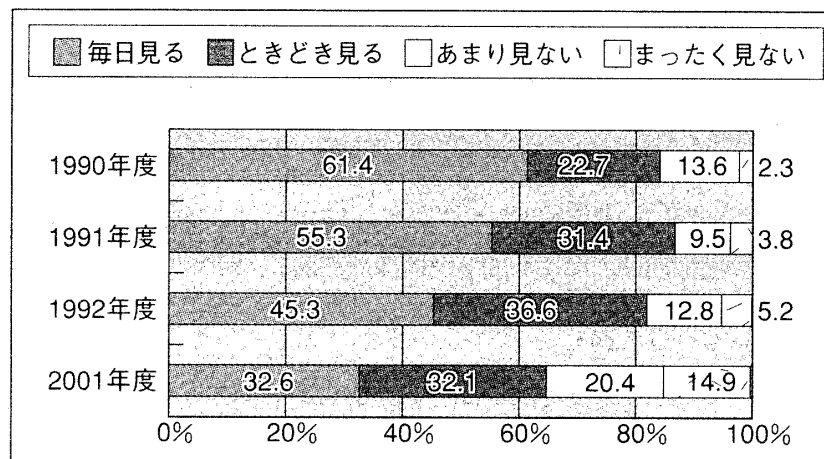


図1：新聞の見方に関する調査結果

回答者：1990年度～1992年度はB大学で、それぞれ88名、105名、172名、2001年度はA大学とB大学で221名である。なお、1990年度～1992年度は選択肢の「あまり見ない」は「ほとんど見ない」である。

このような傾向は、第1章で紹介した「情報化社会と青少年に関する調査」における、新聞の閲読時間調査からも明らかになっている。第2回調査（1991年10月、この調査は10歳～29歳が対象）²⁰⁾では「ほとんど読まない」者が13.1%である（この回の調査では「まったく読まない」では

なく、「ほとんど読まない」という選択肢である)。ところが、「まったく読まない」者が第3回調査(1996年6月)では15.4%、第4回調査(2001年11月)では22.3%となっており、読まない者が増えていることがわかる。また、これを大学生と同年代に限ってみると、第2回調査では10.2%(19~22歳)であったが、第4回調査では24.2%(18~22歳)と、読まない者が10年間で2倍以上に増えている。

この結果をどう解釈すればよいのだろうか。「新聞だけが減っているのか? それとも一般的に「活字メディア」と呼ばれるものの利用が減っているのか? テレビやインターネットから情報を得ていて、新聞が必要なくなっているのか? インターネット上の新聞を読んでいるのか?」など、筆者は種々考えるところである。このような現状にあっては、「もっと新聞(インターネット上の新聞ではなく通常の)を読むように指導していくのが適切であるかどうか?(筆者はそうのようにしたいと思っているが)」についても検討すべきところである。

3-2. 携帯電話の利用に関して

1-2で述べたように、筆者の調査によれば、ほとんどの学生が携帯電話を所有している。これだけ普及してくると、携帯電話を大学教育の中で教育メディアの一つとして活用することができる。その試みも既に行われており^{21) 22)}、今後も増えるものと思われる。

また、携帯電話の中で特にメールを教育内容として扱う必要性も言われている²³⁾。大学生はパソコンのメールを学ぶ以前に、既に携帯電話のメールを日常的に使っている者が多い。そのような現状の中で、メールの使い分けやマナー、モラルをどのように扱っていくか、これも大学における情報教育の一つの課題である。筆者も今後の研究課題としたい。

3-3. 情報教育の内容に関して

大学における情報教育については、これまでも実践例が報告されているが、その多くはコンピュータの操作やプログラミングのような、いわゆる「情報処理教育」になっている。しかし、最近は「合理的な文章作成の方策」とか「絵はどのようなときに有効か」というような、情報発信のための理論を取り入れた「情報基礎教育」の試みや²⁴⁾、情報倫理を取り入れる必要性²⁵⁾も報告され、情報処理に偏らない情報教育がなされつつある。

また、プレゼンテーション演習を主な内容として情報活用能力を育てる試みも行われている²⁶⁾。これは情報活用能力のうちの、情報の発信能力を育てるだけではない。自ら情報を作り発信することによって、情報は人の手によって意図的に作られるものであることを体験することになり、筆者が既述した②の「情報の判断能力」の育成にもつながることを意図している。

今後、筆者はこのような実践例を参考にしながら情報教育の内容をさらに検討していきたいと考える。

4. むすび

本論文では、大学生に対する情報教育の必要性和内容・方法、及びその実践と評価結果について述べた。

筆者は、限られた時間数の中で、しかも1科目だけで十分な情報活用能力が育つとは考えていない。しかし、たとえ1科目であっても、情報活用能力を少なくとも「意識させる」ことは必要だと考えている。

高校生へのメディア教育を実践している丸尾氏は、「より主体的な情報処理を実現するためには「情報を批判的に見る体験」をどのように積み重ねていくのが重要となるのであるが、その前提として、「各自が、情報を批判的に見ようとすることを、いかに意識しているかどうか」が問われることになる。」²⁷⁾と述べている。筆者もこの意見に賛成である。情報関連の授業だけではなく、他の授業においても情報活用能力を意識させる機会を持ち、さらに日常生活においても意識させることが必要であろう。

最後に、貴重な実践資料を提供していただいた、川口恭子氏（梅花短期大学）と丸尾陽二氏（東京都立第五商業高等学校）に御礼申し上げます。

〔参考文献〕

- 1) 園屋高志：大学生に対するメディア教育の試み，鹿児島女子大学研究紀要，第9巻，第1号，1988年3月，pp.159-172
- 2) 園屋高志：大学生に対するメディア教育の試み(2)，日本教育工学会研究会報告集，1992年1月，pp.15-22
- 3) 園屋高志：大学生に対するメディア教育の試み(4)，鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要，第2巻，1992年11月，pp.47-57
- 4) 園屋高志：大学生に対するメディア教育の評価，鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編，第45巻，1994年3月，pp.269-276
- 5) 坂元昂ほか編：メディア教育を拓く，ぎょうせい，1986年12月，pp.65-66
- 6) 鈴木みどり編：メディア・リテラシーを学ぶ人のために，世界思想社，1997年6月，p.8
- 7) 菅谷明子：メディア・リテラシー，岩波書店，2000年8月，p.v
- 8) 藤川大祐：メディアリテラシーと教育－授業づくりを中心に－，コンピュータ&エデュケーション Vol.9，柏書房，2000年12月，p.16
- 9) 坂元昂監修：教育メディア科学－メディア教育を科学する－，オーム社出版局，2001年12月，p.23
- 10) 日本情報処理開発協会編：情報化白書2002，コンピュータ・エージ社，2002年6月，p.51
- 11) <http://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/top.html>に掲載されている。
- 12) 総務省編：平成14年版情報通信白書，ぎょうせい，2002年7月，p.4
- 13) 同上，p.156，p.162
- 14) 臨教審だより，1986年1月臨時増刊，第一法規，p.95
- 15) 情報化の進展に対応した教育環境の実現に向けて（情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議 最終報告），1998年8月答申
- 16) 文部省：中学校学習指導要領，平成10年12月
- 17) 瀬川良明：学校図書館司書教諭講習におけるコンピュータ活用と情報検索の実践，日本教育工学会研究報告集，1999年5月，pp.47-50
- 18) 川口恭子：情報教育の授業方法の提案とその分析(2)－インターネット情報のとらえ方－，日本教育情報学

会第17回年会論文集, 2001年11月, pp. 114-117

- 19) 園屋高志：大学生に対するメディア教育の課題(2)～新聞への関心を高める手だてについて～, 日本教育工学会第11回大会講演論文集, 1995年11月, pp. 519-520
- 20) 総務庁青少年対策本部編：情報化社会と青少年「第2回情報化社会と青少年に関する調査」報告書, 大蔵省印刷局, 1993年1月, pp. 63-64
- 21) 中山実・森本容介・赤堀侃司・清水康敬：携帯電話による遠隔講義支援システムの開発, 日本教育工学会第17回全国大会講演論文集, 2001年11月, pp. 49-50
- 22) 宮田仁：携帯電話対応コメントカードシステムを活用した多人数講義における授業コミュニケーションの改善(1), 日本教育情報学会第18回年会論文集, 2002年8月, pp. 208-211
- 23) 小田和美：携帯メールを教材として扱うことの可能性と必要性, 日本教育情報学会第18回年会論文集, 2002年8月, pp. 178-179
- 24) 大作勝：これからの情報基礎教育のための教材開発, 日本教育工学会第17回大会講演論文集, 2001年11月, pp. 437-438
- 25) 伊藤博文・佐野真一郎：大学教育における情報リテラシの方向性, 日本教育工学会第17回大会講演論文集, 2001年11月, pp. 433-434
- 26) 林徳治：大学生のコミュニケーション能力の育成を図る授業実践と評価, 林徳治・宮田仁編著「情報教育の理論と実践」(実教出版)のpp. 74-78に所収, 2002年5月
- 27) 丸尾陽二：主体的情報処理論(その2)～より主体的な情報処理を目指して～, 東京都立第五商業高等学校発行「研修」第四十一号, 2002年3月, p. 52